

解 答

問一

慈悲

- ① へりくだる心・慈悲心
② 三つボタン・山犬・狐・地曳網の連中

- ③ 無念さ・不正に屈しなかつたという誇り

問二 出典は、下村湖人「次郎物語」。

問三 演説をした生徒には非常に品のよい聰明そうな印象があり、上級生は愛をもって下級生に接し、下級生は上級生に敬意をはらうよう主張していたから。

問四 理不尽な暴力に立ち向かい敗れたとしても、不正を認めない強い意志と勇気に支えられた、人間らしい感情から生まれるもの。

問五 卑劣な者の不正や暴力に対する恐怖心は毅然とした態度で克服し、たとえ自分ひとりでも、本物の慈悲心を持つ人間になろうと決意する気持ち。

① 務める ② 短く ③ 幼少 ④ 形相

解 説

問一 ① 入学式が始まる前、次郎は講堂の左正面にかかげられた額に書かれた四箇条を読んで、いろいろ考えています。

「一、武士道において……」「一、主君の御用にたつ……」「一、親に孝行……」「一、大慈悲をおこし人のためになるべき」と――一頁下段6行めに「第四条の『慈悲』という言葉が、妙に彼の心をとらえた」とあります。

次郎は、「慈悲」の意味を考えようと/or、「慈悲深い方だ」「仏様のような方だ」と村人から言われている「正木のお祖母さん」を思い出しています。一頁下段13行め「次郎は何度も大慈悲の一条を読み返した」とあります。入学

式での校長の訓辞、始業式での校長の訓話のキーワードの一つは「慈悲心」です。最後の場面で次郎の心に浮かんできた言葉も「慈悲」です。問四でも、もう一度ふますが、この文章は、次郎が、体験を通して「慈悲」「武士道」を次郎なりに理解する「成長」物語として読むことができます。

② 「入学式における校長の訓辞」が描かれているのは、2頁上段18行め～同下段8行めの範囲です。その冒頭で、「君らは日本の少年の中の選士である。選士に何より大切なのは、へりくだる心と慈悲心でなければならない。そういう心をもつた人だけが、ほんとうに正しい努力をする。正しい努力をする人だけが、ほんとうに伸びる。伸びる人であつてこそ真の選士といえるのだ」と語りかけ、「学問においても心の修養においても、伸びて伸びやまない人間になつてもらいたい。それでこそ日本が伸びるのだ。へりくだる心、慈悲心、そして伸びる日本――諸君を迎える私の第一の言葉はこれである」と結んでいます。3頁上段17行めの「校長の始業式の訓話」と間違えないように注意しましょう。

③ まず4頁上段2行め～「人相がよくないうえに、制服のボタンが五つのうち三つしかついていない」五年生が登場します。以後「三つボタン」と表現されます。次に登場するのが5頁上段1行め～「見るからに憚猛な山犬のよくな顔の生徒」――そのまま「山犬」。続いて5頁上段19行め「それはすごいほど眼の光った、青白い狐みたいな顔の男」――言うまでもなく「狐」。個人は以上ですが、新入生を取り巻く野次馬ともいうべき五年生たち――「新入生の整列が終わつたと見ると、急にその周りをぐるりと取り巻いた。それはちょうど地曳網を下ろしたといった格好であつた」(4頁下段4～6行め)――以後彼らは「地曳網の連中」と表現されます。

④ 「始業式の日、校門を出てから」の次郎が描かれているのは、7頁下段22行め以降。「門を出ると、無念さが急に込み上ってきて、涙がひとりでに頬を流れた。だが同時に、不正に屈しなかつたという誇りが、彼の胸の中で強く波打っていた」8頁上段3行め以降は、この日の体験をふりかえて「慈悲」の意味について次郎なりに考えを進めている場面ですから、「気付」くとという表現はふさわしくありません。

問二 不当な暴力である「鉄拳」制裁に対して無我夢中で反抗した次郎でしたが、徹底的に叩きのめされます(6頁下段4～13行め)。6頁下段18行めに「もうすっかり落ち着いていた」とあるように意外にも冷静にふるまつていた次郎でしたが、「ふと眼の前に、踏みにじられたようになつて転がっている帽子が眼についた」(7頁上段3・4行め)直後、「彼は思わずかとなつた。同時に鼻の奥が酸っぱくなつて、そこから熱いものが眼の底にしみてくるよ

うな気がした」（7頁上段7・8行め）と描かれています。「かつとなつた」は、怒り、泣きそつになつたのは悔しさからと考えてよいでしょう。「父に買ってもらつたばかりの」帽子、「昨日初めて組主任の先生に渡された新しい徽章を付けたばかりの」帽子——中学への進学を祝う記念すべき新品の帽子が愚劣な五年生に踏みにじられたことに対する怒りと悔しさに耐える次郎の姿が描かれています。

問三 「演説した生徒」が描かれているのは、4頁下段7～21行めです。次郎の眼には「非常に品のいい、聰明そうな顔つきをしている」（4頁下段8・9行め）と映りました。また、その演説内容も「校風は愛と秩序によつて保たれる。上級生は愛をもつて下級生に接するから、下級生は秩序を重んじて上級生に十分の敬意をはらつてもらいたい」（4頁下段15～17行め）というものだったので、行きすぎた“暴力”（新入生いじめ）を止めているのだろうと

次郎は想像したと考えられます。

問四 まず、直前の次郎の気持ちや思いに注目しましよう。無念の涙を流しながらも「不正に屈しなかつた」という誇りを感じています（7頁下段22行め～8頁上段2行め）。敗れたとはいえ不当な暴力に抗つて不正を認めないと、う意思表示はしたという「誇り」です。その時「武士道」と「慈悲」という言葉を思い出します。校長の始業式の訓話です。「不正なこと」というのは慈悲心のない行いじゃ。武士道におくれをとらないというのも慈悲心が内にみなぎついて初めてできることで、それがなくては武士道も何もあつたものではない」（3頁上段21行め～同下段3行め）——自分の正しいと思うところを慈悲心をもつて行う、その延長線上に武士道がある——次郎の中でのそのような理解が成立したにちがいありません。——線部直後、次郎は校長の言葉を思い出しています。「涙のある人間だけが、すべてを支配することができるんじや」——「涙のある人間」＝「慈悲心のある人間」＝他者の苦しみや悲しみを思いやることができる人間が正義を行いうると読みかえることは可能でしょう。

問五 問四で解説したように、この日体験したことを通して、「慈悲」や「武士道」について次郎なりの理解が成立したと考えられます。校長の言葉にも深く感動していることがわかります（8頁上段7行め～同下段2行め）。心に慈悲心を持つことで、武士道の精神にかなう生き方をする人間になる、それは不正に屈することのない正義に生きる人間になることだ、そんな人間になろう、多くの新入生たちが不当な暴力を恐れて「青い顔」をしている中にある、たとえ自分ひとりでも——そんな決意をしたにちがいありません。